

# 文章的表现と性格研究覚書

— 女子学生の文章から —

大 西 久 男

## 目 次

- |          |          |
|----------|----------|
| 1. はじめに  | 4. 結果と考察 |
| 2. 目的と問題 | 5. 結論と要約 |
| 3. 方 法   | ★参考文献    |

### 1. はじめに

筆者は前号（本学紀要・第23号）で発表した小論（『女子学生の文章表現と性格』— 予備研究としての試論 —）の結論として、4つのことを今後の検討項目の問題としてあげておいた。しかし、その後いろいろ反省をしてみて、文章の性格特性を表わす手がかりとなる項目の調査研究を、もう少しおこなわなければならないものと考えた。

このことは、前号の結論でふれているが、今回はこのことに調査研究の視点を絞ることとした。

したがって今回の調査研究は、前回の延長線上にあるものと考えておこなった。

前回の小論は、予備研究としての立場を維持し、文章表現が個人の性格とどのように関わりがあるのか、その研究方法を将来的にどのようにしたらよいのか、などを考え、そのための予備研究として手をつけたわけである。

もちろん、これまでの先達の諸研究などはわかる限り読ませて頂いたものの、筆者の知り得ない文献など多くあると思うが、出来る範囲は努力した。

しかし、世の中の評価が定まった作家の作品とか評論などを対象とした研究が多いだけに、筆者が目的としている女子学生の文章を、作家の作品と同一線上においておこなう研究が、果してよいのか、という危惧の念も抱いていることは事実である。

それなのに、なおこだわるのは、女子学生といえども、自分が記す文章には必ず性格を反映するものに違いないと、頑固に考える筆者の性格が、あるいは問題かも知れない。

ひとつの文章は、ことばの形をとって、ひとりの人間の意識を紙の上に定着させたものであると考えられ、その文章がその筆者の精神なり性格と結びつくものとすれば、その文章はその時の筆者の精神・性格を反映していると考えるのである。

誇大に言うと、文章は即ち人間である。といわれる所以はここにあるのではないか。と考えるわけである。

そのために文章を解明することが、必要条件となることについては、前号でもしばしばふれた通りで、文章心理学的な視点から考えていくことも、ひとつの方法なのである。

文学とか文章を、心理学的な面から考える場合には、次のような三つの方法がある、と安本美典氏は指摘されている。

(文献1)

- (1) 精神分析学的方法
- (2) オーディエンス・リサーチ的方法。
- (3) 文章心理学的な方法

である。

最初の精神分析学的方法というのは、作品のなかに抑圧されたものやコンプレックスなどを見出そうとする方法で、作品研究よりも、作品

を通して作者の精神構造を分析しようとするものである。

次のオーディエンス・リサーチ (audience research) 的な方法というのは、作品の分析というよりは、それを受けとる読者の心理の分析に重点を置く方法で、出版社などが営利上の目的でおこなうのが多いというが、現在ではまだそれ程研究がすすんでいないようである。この方法が確立されれば、どんな作品がどんな読者に、どのように受け入れられるかが分かってくることと思われる。

これはつまり、読者の立場に立って考えてみることであろう。

わかりやすい文章とか、読みやすい文章というのは読者の方に重点を置くことになるわけで、アメリカの心理学者ルドルフ・フレッシュ (Flesch, R.) という人は、「文章の読みやすさ」についての研究で知られているが、実験心理学的な方法で調査研究をおこない、「文章の読みやすさ」の要因を明らかにしている。文章の「読みやすさ」というのは、文章が平易であることと、<sup>(文献 2)</sup>興味のあることとの二つの面に分けられるということである。

安本美典氏によれば、文章が「平易である」かどうかは、センテンスの平均的な長さ、用いられている語の平均シラブル (音節) 数とによるという。

<sup>(文献 3)</sup>それ故、センテンスの長さが平均して長ければ長いほど、文章は読みにくくなる。

また文章が「興味のある」ものかどうかはその文章が「人間的関心」に富んでいるかどうかによるという。

フレッシュは、文章の「人間的関心」の度合いは、その文章中の「人格語」と「人格文」との数が関係するといっている。

人格語というのは、人称代名詞や人名や父、母、姉、弟などの言葉、あるいはまた、人びと、人たちなどで、人格文は会話文、疑問文、命令文、依頼文、感嘆文などである。

われわれの日常生活でも、身近かに人格語や人格文を用いた広告文が多いが、どんな文章が読みやすいのか、記憶に残るかは経験的に知られていると言ってもよい。

さて、最後の文章心理学的な方法というのは、文学作品ならその文学作品を分析し、主に統計的な方法によって、文章の謎を探ろうとすることである。

単に活字が並んでいるにすぎないひとつの作品が、読者に深い感動を与えたり、反対に退くつさを感じさせたり、考えれば不思議なことである。

波多野完治氏の『文章心理学』（昭和10年）が刊行されてから、この方面の研究が注目され、氏は今述べたような方法を通じて作者の性格がどんな表現手段でどのように表われるかを分析する方法の基礎を築いた功績は大きいものがある。

筆者は今回も文章の性格特性として、前号であげた項目以外について調査研究をしようとするものである。

## 2. 目的と問題

### (1) 文章の種類と気質

わが国において、文学における文体の変貌がおきてきたのは、昭和の初期ころからで、それは社会情勢に起因することであり、文学の領域にも新しい方向が出て、「文章」に対する関心が高まり、それと共に「文章心理学」に対する関心が起こってきたものと考えられるが、こうした流れの中であって、小林英夫氏は、  
(文献4)

「わが国の近代文の源流を、あまり遠くにまで求めないことにするならば、鷗外と漱石に発すると見るのは、まず異論のないことである。----その文体の性格は、ある意味においてまさに対角線的にあい隔っている。

というのは鷗外の文体は、ひと口に言えば彫刻的、立体的であるに対し、漱石の文体は絵画的、平面的であると言える」<sup>(文献5)</sup> と言っているが、鷗外の場合は材料がすべて準備され、綿密な考慮のもとに選択され、彼の文章の一言一句は中心核から放射状に発出している。一方、漱石の場合は、横の連想の方が重要であって、構想が熟してペンがとられたならば、もう文章はそれ自体生き物のように動き出すという調子である。とも指摘している。いずれにせよ、小林英夫氏の文体論の立場からみた場合、当然の帰結であろうが、そこには作者の気質的なものが文体の特性として表出してくると考えられる。

筆者のような文体論に対する素人的考え方をするものは、偉大な作家に対して誠に失礼と思うが、漱石の方は冗舌で多彩で博識な文体といえはいいのだろうか。

一方鷗外の方は寡黙で控え目な文体といえはいいのだろうか。

ところで、なぜ二人の作家の文体にふれたかという、先に述べたように、その文章は筆者(作者)の精神や性格と結びつくものとすれば、その時の文章は作者の精神、性格を反映していることになると考えているからである。勿論その文章はその時代をも反映している筈である。

小林英夫氏は、大正期の文章界を代表するものとして芥川竜之介をあげ、芥川は漱石の弟子ではあったが、気質的にはむしろ鷗外に近かったのではないか、と言っている。

芥川竜之介が文章上のアポロ主義<sup>(文献6)</sup>を主張したことはよく知られていることだが、文体の特性としては、アポロ的明せきを尊んだ彼は、鷗外に結びつくものと考えられる。

作家三島由紀夫も『文章読本』で森鷗外と泉鏡花とを比較し、鷗外のアポロ的文章と、鏡花のディオニソス的文章の二極を指摘している。ニーチェは人間をアポロ型とディオニソス型とに分けたが、三島の二極の考え方はニーチェの思想をひくものである。<sup>(文献7)</sup>

アポロ型というのは、荒悔に平然と小舟で進む人のように、自らの原理を信じ、他をかえりみない性格をさし、ディオニソス型というのは、渦巻く祭礼の群集のなかに、自我をとけこませ、ぶどうや花束に埋もれた車を豹や虎に引かせていく、あの酒神（バッカス）である（安本美典氏）という。

このことからでも両者の性格というものを推測できよう。

室生犀星は前述の鷗外や漱石、竜之介の三者と比較して独自の性格を持つのではないかと思う。それは前者の三人は文章上からみても構成が緊密で、描写も非常に綿密である。（別に犀星を非としているのではない）。

犀星のは構成がゆるいのではないだろうか。言葉を変えればディオニソス的で、視覚的より触覚的世界を表現する感じである。雰囲気の総合的表現ともいえよう。

やはりここにも室生犀星の性格なり気質が大きく働いているものと考ええる。

功成り名を挙げた作家の作品と、女子学生の文章を、前にもふれたように同一線上に於いて考えること自体、基礎的にあるいは大きな誤りを犯しているかも知れない。

しかし、作家は無意識のうちに、自分の作品のなかに気質的な性格というものを反映していることから考えると、女子学生の書く文章にも、そういう傾向が包含されているのではないか、と考えるのである。

## (2) 調査項目の検討

前号で筆者は文章構造の分析から、作者の性格特性を判断することについて若干述べさせて頂いた。例えば、繰り返すようだが動詞などの使用度が多い「用言型」の文章、名詞を多く使う「体言型」の文章である。

用言型の文章は抒情的であり詩的である。そこでは対象を客観的に描写することにより、作者が対象をどうとらえたか、どう感じたかに力

点が置かれる。

これに対し体言型の文章では、対象そのものが重大で、叙事的であり、やや論理的である。

あるいは文章の長短によっても、作者の性格特性を推測可能であることにも触れた。

精神医学の方からみた場合、分裂病や分裂性性格の文章は短く、躁うつ病や躁うつ病性性格の文章は一般に長いというデータのあることも述べておいた。

前号でおこなった調査項目は、その数が少なかった。それは「名詞の使用度」、「動詞の使用度」、「センテンスの数」、「平均字数」、「平均錯差」の五項目であったが、今回は調査項目を多くした（第1表参照）。

前号でおこなった項目についての説明は省き、今回新しく調査した項目について、若干説明することにする。

しかし、これらの調査項目は、結果としては表面的な特性であって、源泉的な特性とは言えない。源泉的なものは因子分析などの統計的処理の結果をまたなければならないから、今回も表面的な特性の把握にとどまることを前提としている。

#### ①人格語

人格語については前述したことと重複するが、繰り返して言うと人格語としてあげたのは人称代名詞、人名、父、母、姉、弟、人々、人々などの言葉である。フレッシュが文章を読みやすくするひとつの要素としてあげているように、平易であることと、興味のあることが大切で、繰り返し述べるが、興味のあるというのは、其の文章が「人間的関心」に富んでいるかどうかによるという。

この「人間的関心」の度合いは、その文章の「人格語」と「人格文（会話文や命令文など）」の数が関係するという。

#### ②直喩、声喩

直喩としたのは「----のように」などの言葉がついたものを数えた。直喩は言語芸術に特有な手法であって、普通では十分に事物が言表できない場合に、他の最も読者によく知られている事物によって、原事物を彷彿させる手法である。直喩は人によっていろいろ評価されるようであるが、視覚的表象の著しく出る人、即ち想像力が豊かな人はこれを嫌がり、視覚的表象のあまりははっきりしない人、即ち想像力が豊でない人は直喩をおもしろがることを発見した研究もある。

前者はおそらく内省的な性格であろう。<sup>(文献 8)</sup>

比喩にまつまでもなく、表象が浮かんでくる。その状態のところへ、もうひとつの直喩による事物による表象が加わると、二つの表象が奇妙に変形されてしまうため嫌がるものと考えられ、後者は直喩によってはじめて表象がいきいきとしてきて、きっとおもしろがるかも知れない。

声喩に当るものには、例えば「おいおい泣いた」とか「木の葉がざわざわゆれた」のなかの〈おいおい〉、〈ざわざわ〉というものであるが、今回の調査では、声喩としてあげるものは出てこなかった。

### ③色彩語

色彩語はどの文章(女子学生の文章)にも使用されていなかったから、ここでは無視してもいいわけであるが、われわれの日常生活のなかで、色彩というものを避けて通ることが出来ない程、大変身近かな問題なので、それに関連して少し触れておこう。

今回は色彩語で、色彩そのものではないが、文章に色彩語を使用する場合、作者の色彩に対する好き嫌いということが影響すると考えられないか。つまり作者が色を意識して使用するという事で、そこに好き嫌いが作用するのではないだろうか。

色彩の好き嫌いにも、その人の性格が出ると言われるが、これに関する研究は色彩心理学の分野でおこなわれている。

日本人の好きな色は青や白であると、よく言われるが、千々岩英彰氏<sup>(文献 9)</sup>



の調査によると、一寸違うということである。最も好まれる色はオレンジ色、次が赤、白、黄、黄緑、水色、クリーム色などとなっているという。

また同氏によれば、オレンジのような派手な原色の好きな人は、自信欠乏の「しりごみ屋」で、原色の嫌いな人は世渡りのうまい「自信家」型であるという。自信のない人はそれだから、刺激性の強い原色に心が傾くのだという。

色彩語と色彩とは異なるものの、前述したように文章を書く場合、作者が色彩語を使用する時おそらく色を意識するのではないか。そして色の好き嫌いにも人の性格が出ることを無視出来ないように思う。

脇道にそれたが、色彩語と性格の関係は、色彩の感性的作用の点からも考える価値は充分あると思われる。

### 3. 方法

#### (1) 調査対象者

本学の2年生教養学科、専門ゼミナールA・Bの女子学生41名を対象とした。

#### (2) 調査資料

①学生に対しては「私の就職」というテーマで文章を書いてもらい、この文章を調査研究のための資料とし、その中から無作為に5名の文章をとり出して研究の対象資料とした。

②調査項目は、前回の場合より多くした。それは次の**第1表**に示す通りである。

名詞、動詞、人格語、色彩語、 声喩、直喩、名詞および動詞の長さ、 センテンスの数、平均字数、平均錯差
----------------------------------------------------------

第1表 調査項目

③今回も前回と同様「Y-G性格検査」および「内田クレペリン精神検査」、一部であるが「エゴグラム」を比較のための資料とした。

④無作為にえらんだ5名の女子学生の文章は、400字原稿用紙1枚半(600字)できり、そのなかに含まれた総字数をもとにした(第3表参照)。

⑤5名の女子学生については、氏名の代りにそれぞれA、B、C、D、Eと仮定した。

#### 4. 結果と考察

5名の女子学生が書いたそれぞれの文章について、第1表に示したような調査の語句(項目)について調査した結果は第2表、第3表の通りである。

学生 \ 項目	名詞	動詞	人格語	色彩語	声喩	直喩
A	51	35	3	0	0	2
B	46	35	9	0	0	2
C	63	41	5	0	0	0
D	67	35	13	0	0	0
E	46	46	3	0	0	0

第2表 調査結果(その1)

学生 \ 項目	名詞の長さ	動詞の長さ	センテンスの数	平均字数	平均錯差	(総字数)
A	4.4	2.3	12	43	13.5	515
B	4.8	2.8	16	33	10.5	523
C	3.8	2.0	18	29	9.6	529
D	5.0	2.2	13	42	16.6	542
E	3.7	2.8	11	45	9.5	490

第3表 結果調査(その2)

結果について、考察してみることにする。

(1) 名詞の使用度および動詞の使用度については、前号でも考察をおこなったが、調査数が少なかったことから、あえて今回も同様調査してみたわけである。

名詞の使用度が多いのは「体言型」の文章、動詞の多いのは「用言型」の文章と言われ、前者は〈事物への方向〉、後者は〈社会への方向〉という心的な基本方向のひとつの表われとみることも可能である、ということをも前号でもふれたわけで、この傾向はまた、客観に傾くか、主観に傾くかということにもなる。

さて、5名の文章の調査結果それぞれについて考えてみたい。

名詞と動詞の使用度をみると、名詞の多いのは学生Dである。しかもDはセンテンス数が少い割に名詞の使用度が多い。

学生Cも名詞の使用度が多いが、センテンスの数も多いから、当然多くなるわけである。

平均字数をみると、学生Cは29字に対して学生Dは42字である。平均字数の長い短いというのは、つまり長い文と短い文ということである。そこで、この2名の女子学生の文章の長短を考えてみる前に、文の長さということについて、それが持つ心理学的意義は何であるのかを考えてみよう。

レトリックの立場からみると、これまでも長い文短い文について、種々のことが言われていたようである。

イギリスの心理学者アレクサンダー・ベイン (Bain Alexander, 1818~1903) は、「短い文章は簡単で直截であるが、そのかわり、ややもすれば唐突でけいれん的になりやすく、長い文章はリズムと抑揚を得るに適し、かつ場景を完全に描写しつくすことができる」と言っている。

ベインはイギリスの連想心理学を<sup>(文献10)</sup>発展させたいとひとり(「心理学辞典」)とされているが、一般的な連想心理学とは離れた立場にあったよう

で、彼の考えは感覚的経験から知識がつくられるその第一歩は連合によるのではなく、弁別によると考え、すべてのものの由来は、経験に帰せられることとは異った考え方をもち、かつまた彼は修辞学者でもあったから文章に対する関心は深いものがあつたのである。

このほか、文体上の分類から文章の長短にふれているものもある。長い文章の多くは優柔体、短いのは剛健体という分類のしかたである。優柔体とか剛健体という文体を考えてみた場合、その文章の作者の性格などを想像し得るのではないだろうか。

小説家はおそらく作品を書く場合、文の長さは自分の考えというものをどんな様式で言葉の上に再現しようかと考えるのに違いない。

この点から考えると、言葉の持つニュアンスに力点を置くか、あるいは言葉を通じてみすかされる「物」自体のニュアンスに力点を置くか、であろう。

作家は常に自己の文章を通じて、何らかのニュアンスをだす努力をしているのである。

つまり作家が言葉の持つニュアンスを積極的に利用するか、それとも言葉を通してみすかされる物自体のニュアンスに依存しようとするかにかかっている（波多野完治氏）ことになる。

波多野完治氏はまた次のように述べている。

（「言葉の方に くしたがって社会化の方に」<sup>(文献11)</sup> むけられた作家」は、言葉の持つニュアンスをもって、できるだけこまかく物なり現象なりの再現を期するに対し、「物にむけられた作家」は適確な言葉を使って、物自体をわれわれ読者の心に印象しさえすれば、あとは物自体のニュアンスがひとりでに効果を発揮するというような方法をとる。----）と。

要は文が長いか短いかは、小説家の場合であれば、作家が社会化にむいているか、あるいはまた事物にむいているか、性格的な傾きによって決まるのであると思うのである。

(2) ところで文の長さの問題は、われわれの日常生活の上で大きな役割りを果しているということを案外忘れていたのではないか。

前述したように、文の読みやすさについてはフレッシュの研究をあげたが、第二次大戦中のアメリカの研究も参考に紹介する。

大戦中アメリカでは多くの若者を動員したが、<sup>(文献12)</sup>その時命令を伝える場合の、センテンスの長さが問題となり、どの程度の長さの文が理解しやすいか。このために心理学者、社会学者、言語学者が調査に当たった。

その結果、ひとつのセンテンスは20語以内が最も理解しやすいことがわかった。

命令や連絡事項は、短文でおこなわれることになったということである。

わが国の文章の場合も、文の長さがあまりに長いと読みにくくなり、したがって理解されにくくなる。森岡健二氏は小学校、中学校、高等学校の各学年の教科書を調べ、文の長さを調査された。結果は第4表の通りである。

<sup>(文献13)</sup>国立国語研究所でも、センテンスの長さについて調査されたことがある。各種の雑誌のセンテンスの長さについておこなった結果、その平均は第5表の通りである。

また波多野完治氏も似たような調査をされていて、その結果は第6表のようである。

<sup>(文献15)</sup>一見不必要と思われることを述べたように思われるだろうが、筆者としては、文の長短というものは作家なら当然であろうが、女子学生といえども、性格の傾きによる影響が働くと考えているから述べた次第であることをご理解頂きたい。

(3) さて前述の女子学生CとDを比較すると、平均字数は29字と42字である。しかし前号でもふれたように、性格の傾向を考えるとときに大切なのは、文の長さの変化である。

教科書	小学校3年	小学校6年	中学校3年	高等学校3年
文の長さの平均	28.4字	36.3字	43.5字	47.0字

第4表 教科書の文の長さ  
(森岡健二『文章構成法』より)

雑誌	専門雑誌	総合雑誌	文芸雑誌	大衆雑誌	児童雑誌
一文の字数平均	75.7字	58.7字	42.5字	37.5字	29.1字

第5表 各種雑誌の文の長さ  
(『国立国語研究・年報3』より)

	non-fiction	新聞	読本	小説
文長(平均字数)	60.5	97.9	39.2	34.5
文長(標準偏差)	41.6	57.4	28.6	26.6

第6表 新聞・小説などの文の長さ  
(波多野完治『現代文章心理学』より)

文の長さの変化は平均錯差でわかるが、即物的性格と観念的性格に深い関係があるのは文の長さの変化、即ち平均錯差である。

観念的性格の文章は、言葉の持つニュアンスに大きな注意が注がれ、即物的性格の文章では、言葉の持つニュアンスが意識的に抑圧される。自分の思考のリズムが一定する傾向にあれば、文章の長さにそれ程変化はないから、平均錯差は少ない。観念的性格の表われと考えられる。

また反対に自分のリズムで書こうとしないで、もののリズムを文に移すとき、平均錯差は大きく、即物的性格の表われと考えられよう。

女子学生Cの平均錯差9.6、Dは16.6と両者の差は大きい。この数字を見る限り、Cの文章は観念的性格で、Dは即物的性格とみることが出来るよう。

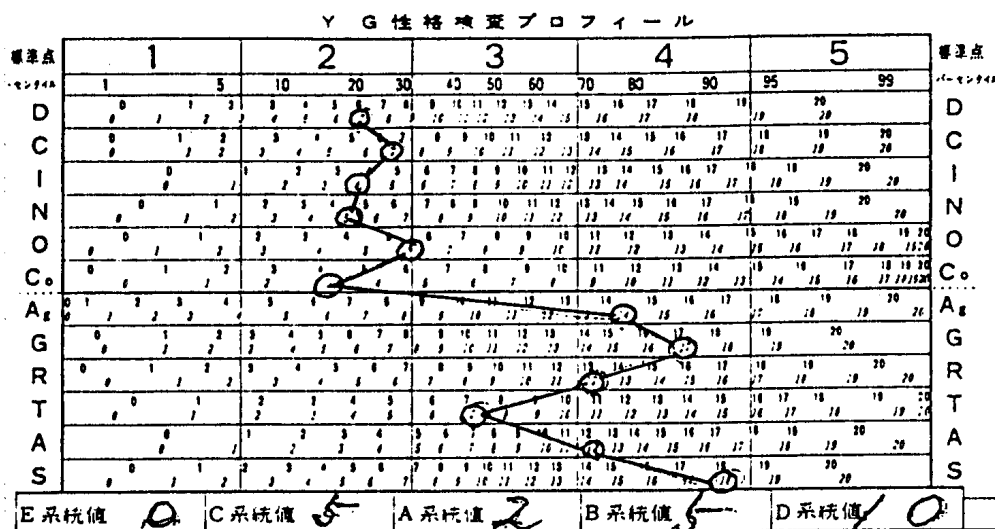
(4) そこで二人の他の検査(Y-G検査と内田クレペリン検査)の結果と比較してみることにする。

女子学生CとDの「Y-G性格検査」と「内田クレペリン精神検査」を次に掲示する(第7表～第10表)。

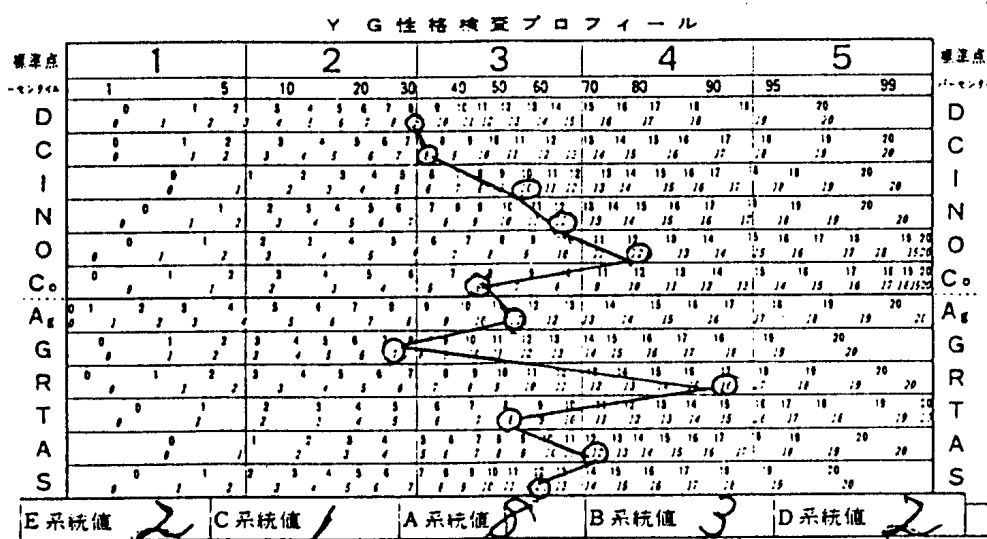
学生Cの文章は平均錯差からみると、観念的性格を表すものと考えられるが、Y-G検査からみると、CのYGプロフィール五類型のなかの「D型」で、いわゆるDirector（代表者）のタイプといわれるもので、心理的な表現で言えば安定積極型である。

Cの動詞使用度が他の女子学生と較べると特に多い方ではないが41個である。

動詞を多く使用するという事は、観念的性格の文章の必然的帰結で



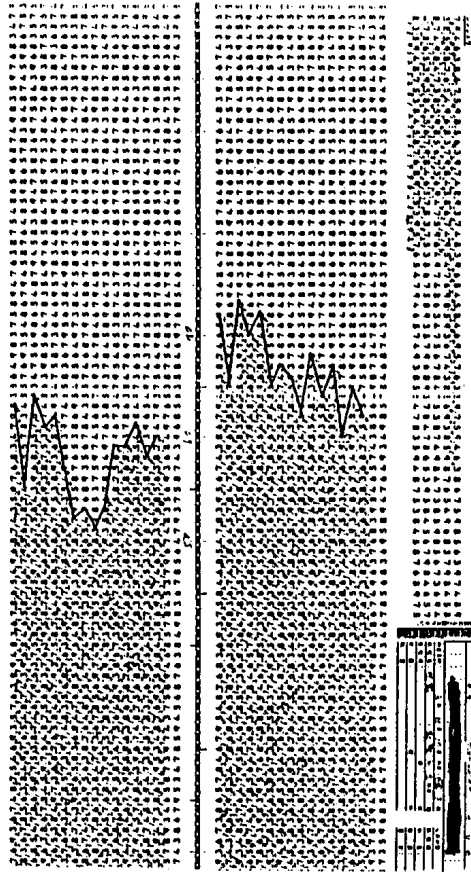
第7表 CのY-G性格検査プロフィール



第8表 DのY-G性格検査プロフィール

Ⓐf

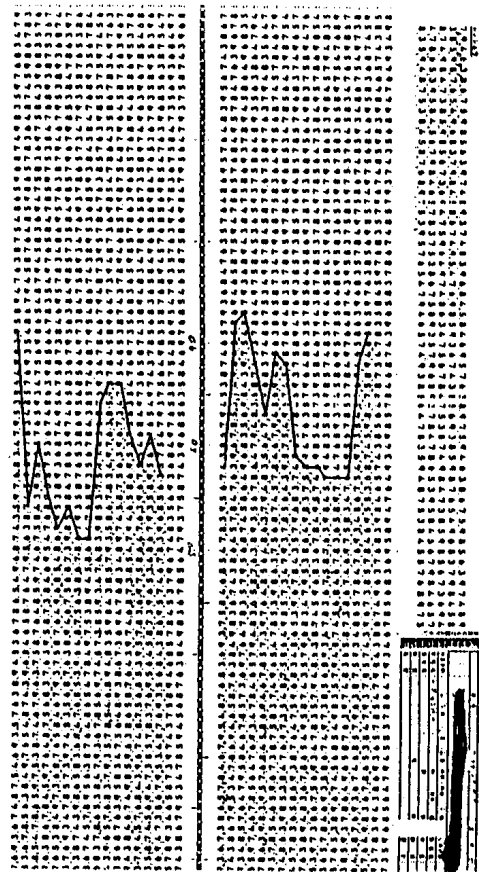
AV 62  
R 114.9  
PF 5.6



第9表 Cの「内田クレペリン精神検査」

Ⓐf

AV 61  
R 108.5  
PF 18.3



第10表 Dの「内田クレペリン精神検査」

ある（波多野完治氏）という。そして、動詞の使用度の多い用言型は、ユング（Jung, C. G.）の外向型に結びつくと考えられているが、学生Cはむしろ名詞の使用度が多い「体言型」のように思われるのである。

しかし学生Cはセンテンスの数が5人の中では最も多いから、名詞の使用度も多いのは当然である。したがってCの場合は平均錯差に視点を置いた方がよいように思うわけである。

女子学生Dは即物的性格と考えられる。センテンスの数も多い方だが、名詞の使用度は5人の中で最も多い67個である。



「Y-G性格検査」をみると、学生Dのプロフィール類型は「A型」と判定される。

Average Typeで平凡な人間のタイプであろう。しかし、A'型であるから全体的には性格のバランスを保っているが、YG検査の12尺度の一部の尺度において、どちらかの方に偏向していることが予想される。

学生DはR (Rhathymia. のんきさ) の尺度の部分が多少偏向している。

この性格特性は、友人たちといっしょになってはしゃぐように、何か刺激を求めるなどの気軽な衝動的な性質である。

即物的性格でユングの内向型に結びつくが、一面上記のような面もあるのだろうか。

これは「内田クレペリン精神検査」の結果からも考えられる。

第10表をみると、曲線類型判定は「(af)」であるが、曲線から判断されることは、人付き合いは広いが、好き嫌いがはっきりしている方で、また感受性強く、気分によるむらなどもあると考えられる。つまり学生Dは内向的な性格と考えられるわけである。

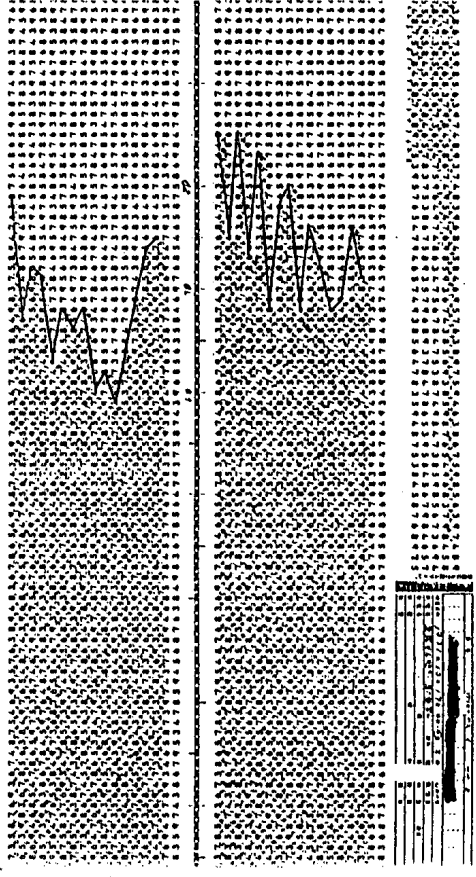
学生Cも曲線類型判定は「(af)」と判定されるが、曲線から判断される特徴は、力があるものの、ためらい勝ちなところがあり、内気なように考えられるのだが、決心したら積極性を発揮するタイプであると思われる。

女子学生CとDの2人については、文章構造上から推測される性格特性は、Y.G検査や内田クレペリンと共通したものがうかがえるということである。

(5) ところで他の3名(A、B、E)の女子学生はどうであろうか。

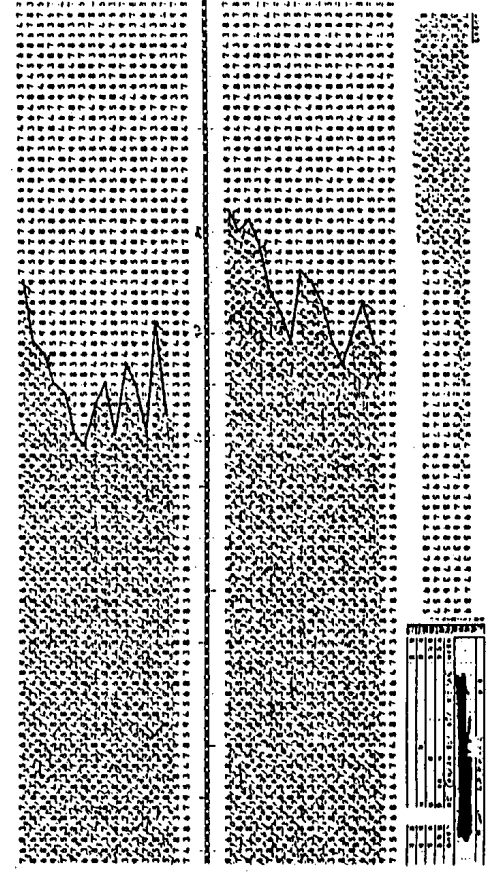
さしあたって、学生A、B、E3名の「内田クレペリン精神検査」および「Y-G性格検査」の結果を次に提示してみる(第11表～第16表)。

(āf)  
 AV 71  
 R 110.8  
 PF 8.5



第11表 Aの「内田クレペリン精神検査」

(ā) ~ (āf)  
 AV 69  
 R 114.0  
 PF 4.0



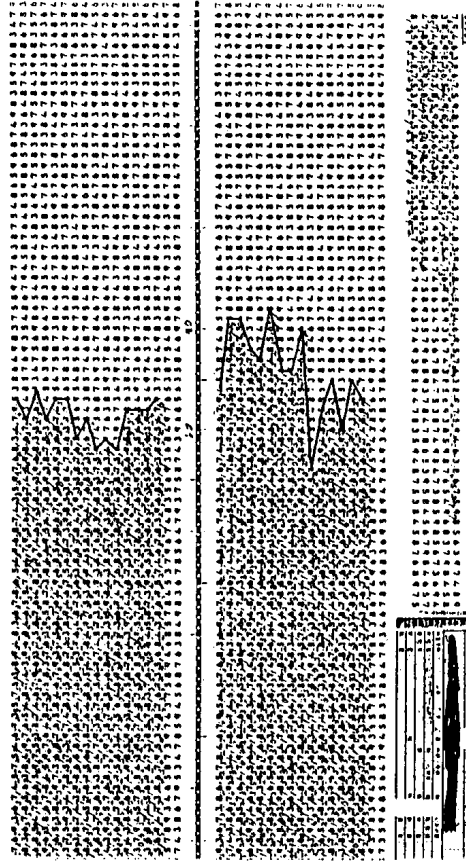
第12表 Bの「内田クレペリン精神検査」

af

AV 49

R 117.7

PF 5.1

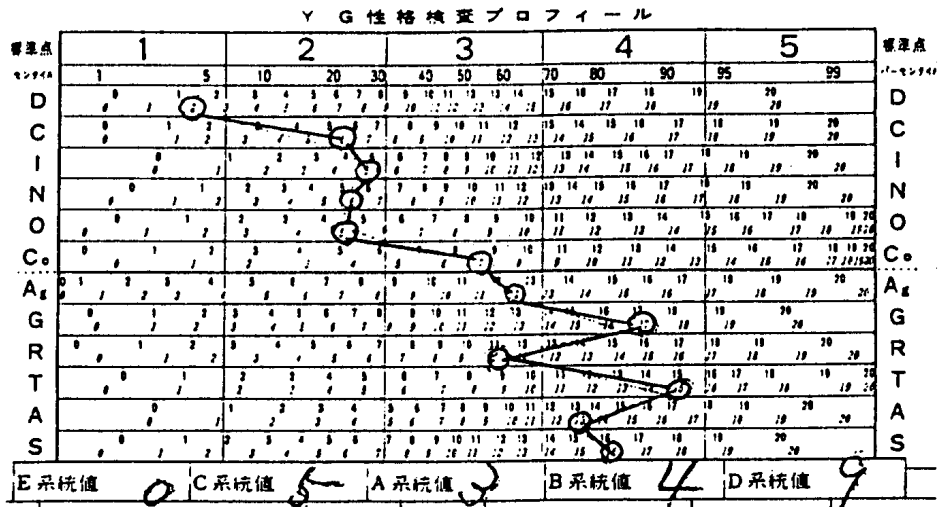


第13表 Eの「内田クレペリン  
精神検査」

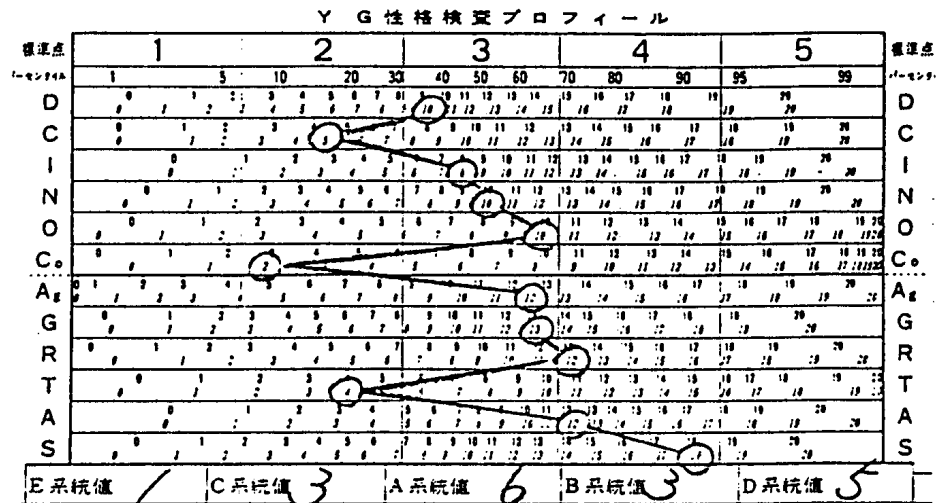
Y G 性格検査プロフィール

標準点	1					2					3					4					5					標準点														
パーセント	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99	パーセント
D	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	D								
C	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	C								
I	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	I								
N	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	N								
O	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	O								
C <sub>o</sub>	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	C <sub>o</sub>								
A <sub>g</sub>	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	A <sub>g</sub>								
G	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	G								
R	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	R								
T	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	T								
A	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	A								
S	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	S								
E系統値	7					1					2					9					3																			

第14表 AのY-G性格検査プロフィール



第15表 BのY-G性格検査プロフィール



第16表 EのY-G性格検査プロフィール

女子学生Aについてみると、平均錯差13.5（第3表参照）であり、前述の学生Dに次いで大きい。Dの16.6という平均錯差と比較してその差は約3であり、Dよりは多少低い程度の内向性とも考えられる。

しかし、センテンスの差はほとんど同じなのに、名詞の使用度はDよりかなり少ない。そして動詞の使用度は同数である。すると即物的性格とも観念的性格とも判断しにくい面が浮かんでくる。

文章構造上から考えると、どちらの類型に入るのか迷う状況である。

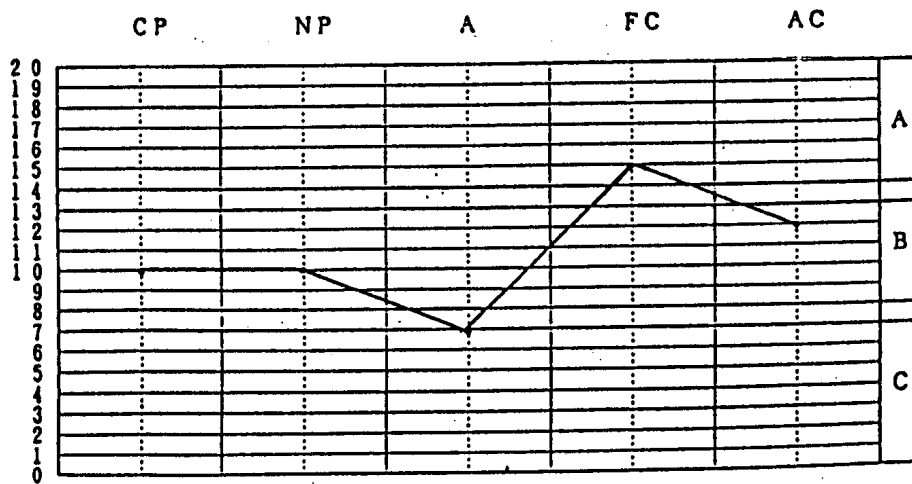
「内田クレペリン精神検査」での曲線類型判定は「(af)」であるが、曲

線からみると社交性を好まず、感情的にしまいこむ方で、表面おっとりしていても、内面の敏感さが伺える。こういふと、Aは内向型のタイプと考えられるのだが、「Y-G性格検査」では「B型」(Blast type)で、性格特徴としては、Y Gプロフィール五類型のなかでは、好ましくないタイプである。

「この型は情緒不安定、社会的不適応、活動的、外交的で性格の不均衡が直接外面にあらわれやすいもの」であるといふ。

文章構造上からみた場合、<sup>(文献16)</sup>前述のように判断しにくいものであり、内田クレペリンの曲線から、もう少しつけ加えて言ふと、思慮のまとまりを欠きやすく、思わぬ言動も表れる、ということが考えられる。

参考に学生Aの「エゴグラム」を次に示してみる。(第17表)。



第17表 Aのエゴグラムの結果

第17表をみると、願望や空想が独り歩きしやすい性格であることと思われる。

学生Aの文章は文章構造上の分析を通して推測されることは、どちらかといふと判断のしにくい面がでていふように思われた。

学生Bについてみると、平均錯差10.5である。しかしセンテンスの数は5人のなかでは学生Cに次いで多い。だが名詞と動詞の使用度が割に少ないようである。平均錯差だけで判断するのはどうだろうか。名詞と動

詞の使用度のいずれかが、傾向を示す数値であればいいのだが、学生Bの場合はあいまいである。

文章を書くことを職業とする作家などは、おそらく自分の意識ではまわりの世界を内部に反映させるものであろう。

それ故、文章のタイプとか特徴は、それを書いた作家などの外界に対する反映のしかたのタイプや特徴と結びつき、それが性格の傾向を示すことに結びつくものと考えられるのだが、形態上の特徴によって分類する文章の類型論のみで判断することが困難なことも当然あり得ることである。

重要なことは、どんな形態がどんな内容の文章と結びつくかを明らかにすることで、文章の形態上の特徴と内容とは分ち難く結びついていると考えられる（安本美典氏）ということであって、このことは因子分析によって源泉的な因子を見出さなければならない。

今回のこの調査研究は、表面的な特徴を見出すことにとどまっていることは前述した通りで、文章の類型によって、その作者の性格との関係を明らかにすることは、文章心理学の大きな課題でもある。表面的な特徴の研究も、そのための一端を担うものと考えているのである。

また文章を考える場合に、最もふさわしい考え方として、第二信号系の理論があげられてきている。性格研究の歴史を考えると、クレツチマー（Kretschmer, E, 1888～1964）の「体型論」<sup>（文献17）</sup>を手がかりとして発展したと考えるが、人間の体型と性格——即ち生物学的な基盤を原理としたもので、先天的遺伝的な要素をもとに、人間の気質とか性格を考えた。

しかし人間の性格は、生得的なものが環境などの影響をうけて成立すると思われている現在、その文章の作者の性格を、生得的なことを考えるだけでは不十分であり、特に第二信号系の働きを重視しなければならないことになるのではないか。

こう考えていくと、ひとりの女子学生の文章を、上記のような視点から考察することは大変なことである。しかし文章の作者がどんな環境(社会状況、友人関係、家庭生活、学生生活なども含めて)の中で過しているかも考慮することは大切であり、それがY-G検査や内田クレペリン検査の結果に表われるものと考ええる。

こうした複雑な要素のからみ合いが、ひとつの文章に、表面的ではあるが表出してくることに望みをかけるわけである。

さて学生Bは用言型とも体言型とも言いきれない面がうかがわれると述べたが、Bの内田クレペリン(第12表)をみると、曲線類型判定からいうと「(ā)~(āf)」で大変安定したタイプと思われる。何ごとに対しても協調的で、また出しゃばらない。そしてこだわりがなくてきばきと仕事をするし、粘り強さがある性格と判断される。

Y-G性格検査の方はどうか(第15表)。明らかに「D型」である。優れた管理者タイプで、安定積極型と考えられる。性格のよい面が外部に表われやすい型で、情緒的には安定し、活動的積極的外交的とされる。

学生BのY-G検査と内田クレペリンの結果は、共通性が認められるものの、文章構造上の分析からは、前述したようにそれ程はっきりした差は認めにくいようである。学生Eについてみる。

文章構造上から考えると、動詞の使用度は最も多く46個である。そして平均錯差は最も小さく9.5である。これから考えると、Eは用言型で観念的性格の文章とみることが出来よう。

ユングの外向型と結びつくものと考えられる。内田クレペリン検査(第13表)は「āf」の類型判定で、曲線の状態から考えられることは、こだわりがなく、何にでも対応する方であろう。またY-G検査の結果(第16表)は、「AD」型で、平均的なタイプであるが、一面安定積極型でもある。

「AD」型という性格類型をわかりやすく説明するために、色の分類を説明するための色彩八面体を利用するとわかりやすいので、それで説明してみることにしたい。

これはY-Gプロフィールの「ピラミッド説」と称する（辻岡美延氏）のだという。

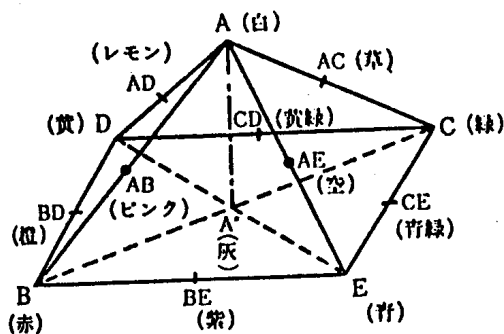
(文献18)

辻岡美延氏は次のように説明されている。氏はピラミッドを上下二つに合わせた八面体（第1図）で、Y-Gプロフィールを考えた。

性格のピラミッドというのは、上下のうちの上の部分の普通のピラミッドだけと考えればよいというのである。

そして辻岡氏は次のように述べられている。

「第1図のように五つの頂点にはABCDEの完全な典型があり、Aを下へおりた底辺にはA'がある。A'B'C'D'E'は混乱をさけるために省略してあるが、それぞれA、B、C、D、Eの近傍にあると考える。混合系統のAB、AC、AD、AE、およびBD、BE、CE、CDは頂



第1図 Y-Gプロフィールのピラミッド図  
(辻岡美延「新性格検査法」より)

点間の中点にある。

このように考えると、あらゆる性格類型はこのピラミッドの表面又は内部にあることになる。実際は頂点や稜線上にあるのはまれで、大部分は少しずつ五つの要素が混合しているから少し内部にあるといえる。



ちょうどこれを色彩八面体の上部にたとえて考えるとわかりやすい。

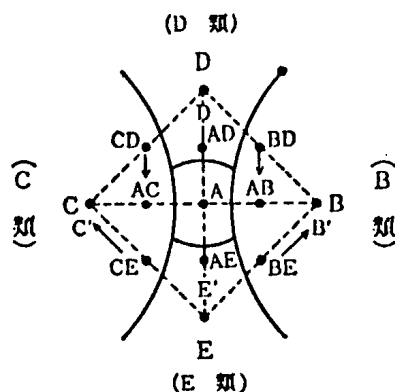
Aは純粋な白色で四つの要素の完全な内部配合であり、A'は純度の低い不完全なミックスの灰色である。Bは暴力的激情的な赤にたとえられるし、Cは鎮静を示す緑に、Dは明るい黄色に、Eは陰気で遠慮深い青色に、BEは不吉な紫に、BDは橙、CDは黄緑、ABはピンク、ACはあわい草色、ADはレモン色、AEは空色にたとえられる。

性格類型にこのように色彩の分類と類推的に考えると非常にわかりやすい(後略)」(辻岡美延「新性格検査法」)

引用が長くなったが、大変わかりやすいものと思うのである。

またこの性格ピラミッドを真上からみた平面図を画けば、第2図のようになり、学生EのY-G検査が「AD型」であったが、前述のように、平均的なタイプではあるが、また積極型でもある。ということが平面図(第2図)をみると、典型的な類型(五類型の性格特徴)から少しくずれたものであることがよくわかると思う。

学生Eは文章構造上の結果と、「内田クレペリン精神検査」、「Y-G性格検査」ともある程度共通したものが出ていると思われる。



第2図 ピラミッド図の平面図  
(辻岡美延「新性格検査法」より)

## 5. 結論と要約

(1) 今回は前号の予備研究としての調査研究を引き続き継続しておこない、その過程でわかったことなどの覚書のかたちで集約することにした。

(2) 前回より調査項目（語句）を増やしたが、結果的には人格語を除く他の項目（色彩語、声喩、直喩）はほとんど考慮に入れる必要がなかった。理由はその使用度がほとんどなかったからである。これは文章のテーマによるものであると考えた。

ここでも前回同様、テーマの設定についてはあらゆる角度から考えねばならない必要性を痛感した。

人格語については、5人のなかでは学生Dの使用度が最も多く13個である。人格語は文章を読みやすくするひとつの要素であることは、フレッシュの研究をあげて前述したが、今回の学生Dの場合は、文章構造上、即物的性格と思われるが、これを人格語の使用度との関係が文章を読みやすくすること以外にあるのかどうか。これからの検討課題のひとつでもあると考える。

(3) 女子学生5人について、これまで述べてきたことを要約すると、学生Aは即物的性格とも観念的性格とも判断しにくい面が出ている。「内田クレペリン精神検査」や「Y-G性格検査」、また「エゴグラム」などとの関係からみても判断に苦慮する。

学生Bは、内田クレペリンとY-G検査の方には共通性がみられるのだが、文章構造上それ程はっきりした差は、今回の調査研究ではみられなかった。学生Bの場合は第二信号系の働きを重視しなければならないようにも考えられたが、今後の課題として残るものである。

学生Cについては、前述のように平均錯差に視点を置いて判断した。結果的には用言型つまり外向型の性格と考えた。

学生Dは、前述したように即物的性格、つまり内向型とみる。Dの場

合人格語の使用度についても検討を加えねばならない必要性を感じた。

学生Eについては、平均錯差も最も小さく、用言型でつまり観念的性格の文章で、外向型と考えられる。内田クレペリンの曲線の状況からみても外向型と思われる。

またY-G検査は「AD型」であり、「AD型」の判断については、Y-Gプロフィール「ピラミッド説」を引用して説明したことで、理解されるであろう。

(4) いずれにせよ今回のものは、前号に引き続いておこなった調査研究であり、あくまでも文章の形態上の特徴から表面的な特徴を見出すことでとどまっている。

文章の形態上の特徴と内容とが結びついていると考えるなら、今後どのように発展していったらよいのか。

それには次の2つのことが考えられる。

①因子分析法によって、源泉的な特徴（因子）を見出すこと。

②文章の類型から、その作者の性格を見出すためには、第二信号系の働きについて検討しなければならないだろう。

文章を分析するということは、その人間の神経活動の働き方のしくみを考えることに結びつくことになる。つまり人間は生得的なもの、後天的なものから性格類型が啓成されるものとするれば、神経活動のタイプは生得的なものが後天的なものに影響をうけて成立すると思われるからである。

つまり生得的気質とは反対の影響を強く受けることもあろう。作者は一種の補償作用を知らず知らずのうちに受けていることになる。

また自分と似たタイプの人の影響を強く受けるかも知れない。第二信号系の働きを考えるというのは、こうした理由からである。

(5) 今回も文章の主題というものが、重要なことである。ということを感じた。

何をテーマにすべきか。実に重要で、かつまたそれは困難な問題でもあると考える。

#### 参考文献

- (1) 安本美典「文章心理学の新領域」誠信書房（1966）
- (2) Flesh, R. 「How to readability」(1961)
- (3) 安本美典「広告の心理学」大日本図書（1986）
- (4) 大西久男「女子学生の文章表現と性格」北海道武蔵女子短大紀要・第23号（1991）
- (5) 小林英夫「ことばと感覚」古明地書店（1950）
- (6) 上 同
- (7) ニーチェ、塩谷竹男訳「ニーチェ全集第2巻」理想社（1975）
- (8) Downey, J. 「The psychology of Metapher」American J.of psychology(1919)
- (9) 金子隆芳「色彩の心理学」岩波新書（1990）
- (10) Bain, A. 「English Composition and Rhetoric」(1901)
- (11) 波多野完治「文章心理学〈新稿〉」文章心理学大系1. 大日本図書（1980）
- (12) 文献3と同じ
- (13) 森岡健二「文章構成法」至文堂（1966）
- (14) 国立国語研究所「国立国語研究所年報3」同所（1952）
- (15) 波多野完治「現代文章心理学」文章心理学大系3、大日本図書（1981）
- (16) 辻岡美延「新性格検査法」日本心理テスト研究所（1979）
- (17) 安本美典「文章心理学入門」誠信書房（1965）
- (18) 文献16と同じ